

五木寛之
涙の河をふり返れ



涙の河をふり返れ

涙の河をふり返れ

昭和四十五年三月三十日 第一刷
昭和四十六年二月一日 第十三刷

定価四五〇円

著者 五木寛之

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

印刷所 大日本印刷
製本所 矢嶋製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

涙の河をふり返れ	1
われはうたへど	71
人情ブラウン管	123
望郷七月歌	177
深く暗い海	229

涙の河をふり返れ

その日、私が黒木鋭介と待ち合わせたのは、〈ヘカリンカ〉という小さな酒場だった。

十一月下旬の初冬の街には、すでに重い夜の気配が漂っていた。強い向い風の中を、私はコートコートの襟を立てて足早に歩いて行った。〈ヘカリンカ〉は、私が学生時代から行きつけの古い店である。大学の裏門から出て、戸塚のロータリーを過ぎると、左手の露地の奥に木の看板が見える。時代おくれの小さなスタンド・バーで、およそ古臭いロシア風の造りの店だ。

時代おくれなのは、店の造作だけではなかった。ルパシカを着た中年のマスターと、たった一人の店の女の子も、そうだった。両方とも相当の変人で、店が混んでくると、露骨にいやな顔をした。二人とも、客が少なければ少いほど機嫌がいいように見える。

傾いた扉を押して店内にはいると、マスターが冷たい目でこちらを見た。私が口あけの客らし

かった。女の子は固く唇を結んだまま、カウンターの中でアイス・ピックを動かしていた。

「さっき黒木という人から、電話がありましたよ」

マスターが抑揚のない声で言った。

「十五分ほどおくれるそうです。待っててくれとか言っていましたがね」
私はうなずいて、カウンターの前に坐った。

「水割りを」

女の子が、黙って私の前に赤いコスターを置いた。

「大学のほうはどうですか」

と、マスターが水割りを作りながら聞いた。

「どうって？」

「まだ講師をやってるんでしょう」

「あゝ」

「助教授への道はるか、といった所ですな。講師になって何年たつんです？」

「煙草をくれ」

と、私は言った。私はそういった会話が好きではなかった。

「七年ですか」

マスターは水割りを差し出ししながら、無感動な調子で聞いた。囚人の刑期でもきくような、冷

たい口調だった。そんなところだろう、と私は答え、煙草に火をつけた。

「あと何年ぐらいかかりそうです？助教授になるまでに」

「わからんな」

「大学の先生も楽じゃないね」

私は黙って水割りのグラスに口をつけた。私は学生時代から十年ちかくこの店に通っていて、この男の扱い方については、かなりよく知っている積りだった。際限のない議論をさけるには、相手の厭味を徹底的に無視してしまうことだ。

「黒木さんというと、誰でしたっけ？」

マスターは今度は違う話を持ち出してきた。

「おれの友達さ。黒木鋭介という」

「黒木鋭介——」

マスターは腕組みして首をひねると、

「待てよ、いちど前にこの店に来たことがある人じゃないのかな」

「三年前の秋だ。もう店を閉めるという時間に、おれと一緒に来たことがある」

「そうだ」

と、彼はうなずいた。痩せて、額のはげあがったこの男は、記憶力だけは悪くなかった。

「思い出しましたよ。例の歌手の水沢忍のマネージャーとかいう人でしょう。ほら、研究費流用

事件の責任をかぶって研究室を追放されたとかいう——」

「水沢忍のマネージャーがくるの？」

と、横から女の子が口をはさんだ。「あたし、水沢忍の歌、好きよ」

「おれは嫌いだね。はじめの頃は良かったけど、最近は聞く気がしなくなった。歌は相変らずうまいが」

マスターと女の子は、水沢忍のことで口論をはじめた。私は黙って水割りをなめながら、黒木鋭介という奇妙な男の顔を、頭の中に思いうかべた。

店のラジオが、アニタ・オディの歌をやっていた。窓の外では風の音がきこえた。初冬の夜にうらぶれた酒場で聞くアニタ・オディというのも、独特の趣きがあるものだ。私は黒木とは違って、日本の流行歌には興味がなかった。だが、彼が発見して育てあげた水沢忍という歌い手には、関心があった。彼女が三年前にデビューして、たちまち人気歌手の座についた事件の背後には、社会心理学者のはしくれである私も、多少のかかわりあいがあったのだ。だがおそらくそれは、黒木と私以外の誰も知らない事実にちがいない。

へしかし、今度はどんな用件で会いたいと言って来たのだろう？

私は三年ぶりで突然に電話をかけて来た黒木の真意を、はかりかねていた。彼はすでに私たちとは全く別なコースを歩いている人間だった。私にとって、黒木は、何か無気味な世界に破壊を求めて飛び込んだ落伍者のように思われた。

だが、現実的には、万年講師のまま大学の研究室にくすぶっている私よりも、彼のほうがはるかに成功していたと言えるだろう。少くとも彼は、年間数千万円を稼ぐスター歌手を支配している実力者なのだ。

「おそいですね」

と、マスターが時計を見て言った。

「もう一杯たのむ」

「ダブルにしますか」

「うん」

その時、ドアのきしむ音がした。振り返ってみたが誰も見えなかった。どうやら風のいたずららしかった。

「女の胸に吹く風は——」

と、カウンターの途中で女の子がかぼそい声をふるわせて歌った。それは水沢忍が好んで歌う、もの悲しげな歌の一つだった。私は、そんなじめじめした歌が好きではなかった。詞も、メロデューも、あまりにも日本的に貧しすぎ、哀しすぎて、いやな気がするのだった。

「やめろよ、そんな歌——」

と、私は言った。だが女の子は、かすかに目を閉じたまま、いやいやをしながら、震える声で歌い続けた。黒木は、まだ現れなかった。客も私ひとりだけだった。静かな、奇妙な晩だっ

た。

2

黒木鋭介は、約束の時間を三十分ほどおくれて「ヘカリンカ」に現れた。

「おくれた」

と、彼はぼつりと呟つぶやいて私の隣りに坐った。私を待たせた事で、謝りもしなかったし、言い訳もしなかった。そんな男だった。私は彼のそんな所が気に入っていた。だが、彼をよく知らないほとんどの連中からは、黒木鋭介のそんな態度が歌い手のマナージャーらしくない傲慢ごうまんさと見られていたようだ。

「へ人気歌手を操あやつる陰の男」などという週刊誌の見出しを、電車の中吊り広告で見かけたこともある。

「しばらくだな」

と、私は言った。「仕事のほうはどうだ。うまく行ってるかね」

「お蔭でな」

彼は目をあげて私をみつめ、言外の意味をこめてうなずいた。「あんたのアドバイスが役にたった。あの子が何とかここまで来られたのは、あんたのあの名プランのせいだと思ってる」

「そんなことはないさ」

私は首を振って笑った。だが、彼にそんなふうに言われることは、決して悪い気持ちではなかった。私は少し饒舌になる自分を感じた。

「おれは歌謡曲はわからんし、君たちの世界に関心もない。ただ、マス・カルチュアについてのおれの分析が、現実にとだけ当てはまるかを知りたかっただけだ。いわば三文学者の自己満足みたいなものかも知れん。いづれにしても、おれはあの時ほんの片棒をかついだだけさ」

「あんたはいい学者になるだろう」

黒木は立ちあがって、枯葉色の軽そうなコートを脱ぎ、壁にかけた。昔から身だしなみのいい男だったが、今もそうだった。地味なトラディショナルの仕立てのいいスーツをさりげなく着なし、白のドレス・シャツに黒いシルクの編みタイを結んでいる。少しゆる目に結んでいるタイのあたりに、わずかに彼の住んでいる世界の匂いがした。喋り方や、動作には一種の抑制があつて、崩れた感じがなかった。やや長目の髪の下に、どこか知的な翳りをおびた暗い目があった。頬の削げた蒼白な顔といい、いくぶん猫背の長身といい、私よりはるかに研究室にふさわしい男に見える。

彼の学生時代のことを、私は余り知らなかった。同じ文科系の大学院にいても、彼は国文学が専門だったし、私は心理学の教室にいたからである。

黒木鋭介との出会いは、私が江戸時代のへおかげまいりについて調べていた時、友人の紹介

で彼の所へ資料を借りに行ったのがきっかけだった。〈おかげまいり〉とは、十七世紀末頃から十九世紀までの間に、およそ六十年ほどの周期で大流行した一種のマス・ヒステリア現象である。

その背景にあったのは庶民の〈お伊勢様信仰〉だが、その最大のピークには日本全土から約四百九十万人が家郷をはなれて伊勢詣でにさまよい出たといわれている。封建社会における自然発生的な宗教的集団行動として、社会病理学の研究対象に用いられることがしばしばあった。

私は、黒木鋭介に〈伊勢道中歌〉に関する資料を借りた。私から見ると、黒木という青年学徒は、何かくすぶり続けている導火線を抱いた孤独な男のように見えた。

黒木鋭介が大学の研究室を追われたのは、彼が私と知り合って間もなくの事だった。私はその間のくわしい事情を知らない。ただ私が個人的に聞いた噂では、彼は指導教授である高名な国文学者、羽根崎精吾が研究費流用問題に問われたとき、進んでその責任をかぶったのだという話だった。

その事件の内容や、経過について、関係者たちは石のように口をつぐんでいた。そして私たちは、一人の暗い目をした学生が、アカデミズムの世界から去って行くのを見ただけだった。

その頃、私は黒木鋭介から、E・H・ノーマンの〈フリオの顔〉〈甲子夜話続篇〉など、〈おかげまいり〉に関する数冊の資料を借りたままになっていた。私はその本を返すために、彼の自宅を訪ねた。その日の事は、なぜかいやにはっきりと私の記憶に残っている。

それは乾いた夏の日の午後だった。私は電車を川崎駅で降りて、事務局で調べた黒木の住所を徒歩で探した。

私鉄の踏切を渡り、右の方へ歩いて行くと奇妙な建物の並んでいる一画に出る。その街が、かつての赤線地帯である事は、私にもわかった。いまは転業して、旅館や、安食堂や、小料理屋が軒をつらねている。

ひどく暑い日だった。ただの暑さではなく、毛穴からじわじわと汗が^{あせ}しみ出る不快なむし暑さだった。遠くで砲声のような雷鳴がきこえた。夕立ちでも来そうな気配が、あたりの熱気にあつた。黒木の自宅は、なかなか見つからなかった。その番地には、数軒の酒場と、小料理屋があるだけだった。しばらく歩くと、^へ花むらと看板の出ている小料理屋の店先に、スカートから太腿をむき出しにして坐っている若い女がいた。私は出来るだけ鄭重^{ていじゆう}な口調で、黒木鋭介という学生の家をたずねた。

「黒木鋭介？ ああ、鋭介さんの家ならここだけだ」

若い女は、全く日に焼けていない白い太腿を、掌で隠すようにして、首をかしげた。私は思わず確かめるように目の前の安っぽい小料理屋を眺めた。

「あの、大学の研究室におられた黒木君なんですが」

「変なひと」

と、若い女は言った。

「だから言ってるじゃない。黒木鋭介でしょう？　うちのおかあさんの弟よ。裏の離れにいるはずだわ」

こういつた世界で、女経営者のことをへおかあさんと呼ぶ習慣を、私は知らなかった。私は奇妙な混乱を感じながら、〈花むら〉の店にはいつていつた。店内は低いつい立てで仕切った座敷になっており、カウンター越しに調理場が見えた。店内はがらんとして、人氣がなかった。かすかな脂粉の匂いを私はかいだ。座敷から二階へ通ずる階段が見え、その段の上に、赤い腰紐が刺戟的な感じで落ちていた。

「ごめんください」

私は奥へ向って大声をはりあげた。返事はなかった。私はもう一度、呼んでみた。

「だあれ？」

二階の方から女の声が返って来た。黒木鋭介君の家はここか、と私はたずねた。

「鋭介さんに何の用？」

声といっしょに、階段の上の方から、白い女の足が降りて来た。

しどけなく浴衣を着た色の白い女だった。額が汗にぬれ、幾筋かの髪の毛が肌にはりついていて、ひどくセクシュアルな印象をあたえた。彼女は痩せぎすの体をやや斜に構えて、光る目で私を見つめた。

「あなた、どなた？」

「大学の研究室にいる木島という者です」

と私は言った。

「大学？」

不意に女の顔付きが変わった。

「帰ってよ」

と、その女は斬りつけるような鋭い声で言った。

「大学がいまごろ鋭介に何の用があるの。恥知らず！」

私は驚いてぼんやり突ったたっていた。女の目が、動物のような憎悪をこめて私を見すえた。

鋭介が姿を見せたのは、その時だった。階段の上から、上半身裸のまま、彼は物憂げな動作で降りて来た。私を見て、少し意外そうな表情をしたが、すぐむっつりした顔にもどって、ぼつりと言った。

「あんたか。あがれよ」

女が何か言おうとした。鋭介はうるさそうに手を振ると、

「何か冷たいものでも出してくれないか」

「だって——」

「いいから」

と、鋭介は言った。そして私にうなずくと目顔で、上れ、と合図をした。私は靴をぬいで、彼